

気仙医報



目次

- 巻頭言 「あじさいネット」に学ぶ
気仙医師会 会長 滝田 有… 2
- 理事会報告… 3
 - 第1回理事会報告… 3
 - 第2回理事会報告… 5
 - 平成25年度 一般社団法人気仙医師会定時総会報告… 7
新入会員歓迎会並びに菊田裕先生「医療功労賞」
受賞祝賀会… 8
- 随想
「父のこと」
大船渡市国保越喜来診療所 佐々木 道夫… 9
「大船渡と仕事と私」
岩手県立大船渡病院 脳神経外科 千田 光平… 10
- 医院紹介
うのうらクリニック 院長 鶴浦 哲朗… 12
星こどもクリニック 院長 星 篤樹… 13
- 県立病院各科紹介
岩手県立高田病院 内科 医師 上野 正博… 15
- 学術講演会
「日常診療に必要な薬診の知識～s j sを中心に～」
杏林大学 皮膚科 臨床教授 狩野 葉子先生… 16
- 会員の異動… 18
- 事務局日記… 19
- 編集後記… 20
- 表紙のことば… 20



第126号
2013.7.20

気仙医師会
岩手県大船渡市盛町字内ノ目6-1
TEL:0192-27-7727 FAX:0192-26-2429
<http://kesen-med.or.jp/>

巻頭言



「あじさいネット」に学ぶ

気仙医師会 会長

滝田 有

6月のとある夜、大船渡のプレハブの飲み屋で宴席があった。出席者は医師を中心に十数人のぼった。主賓は長崎県から駆け付けた麻酔科の先生。彼は翌日午前11時半の羽田発飛行機で帰るというのに、午前様の解散となるほど盛り上がった。「地域医療情報ネットワーク」の勉強会の二次会であった。ことほど左様に気仙の先生方はネットワークに関心を持っているのを実感した。

このネットワークはICT（コンピュータによる情報技術）を使い、開業医と基幹病院を連携させて、患者さんの情報をやり取りする手段である。イメージとしては開業医の電子カルテと基幹病院のそれを繋げるのである。処方、検査のみならず全てを双方向に開示するのが理想であるが、現実にはそれは難しいのも承知している。「電子カルテを持たない先生でもネットに繋げるパソコンさえあれば参加できる、双方向にはこだわらない、医療者の損得ではなく、患者さんがより良い医療を受けるためにやるのだ」と長崎の先生も喝破した。

地域医療再生資金等をイニシャルコストに充てる目論見はある。その上でランニングコストをより低廉に抑え、かつ医療者が使いやすい設計をする必要がある。システムベンダーに丸投げでは失敗する、とも聞いた。公のために多忙なる医療者もICTの勉強は必要。ベンダーは医者にはなれないが、医者はベンダーのレベルには達しようという。

このシステム、釜石では既に導入済、3.11でのカルテ消失が教訓となっているのであろうか、三陸沿岸の他地域も気仙より先行している。全国では数十か所でネットワークが成立しているが、実際に活用されているのは少数派だという。2000年代初頭から始めた「あじさいネット」は非常に上手くいっている一例である。長崎の先生とはこの「あじさいネット」の創設者の一人、大村市民病院の柴田真吾先生である。どんなに良く設計しても上手く動くかどうかは結局、医療者同士の人間関係なのだ、彼の話をお聴きにつけ、つくづくそう思う。

気仙環境未来都市の医療等部会に医療情報ネットワークを具体化するワーキンググループがある。開催の折には先生方に告知するので是非ご参加いただきたい。

随 想

父 の こ と

越喜来診療所

佐々木 道 夫

先日の父の日、63才の息子たる私が、91才の父親のところにでかけていった。何の土産もあるわけではなく、ただ、父の日くらい顔を合わせ一緒に食事でも食べないとなんか後ろめたいという気持ちからである。連れ合いを10年前に亡くし、以後独り暮らしを続けている父である。食べることにはあまり興味のない親子であり、食事は近くでラーメンとした。

そのあと、2人で近くの小高い山の上にある神社まで歩いた。この山は、義経の北方逃避行伝説により、九郎判官義経の九郎（くろう）にちなんで、黒森（くろもり）山と呼ばれている。義経が修行したところとされているくらいだから、かなり急峻な山である。道端に沢山実っている木イチゴを味わいながらののんびりとした行程であった。

じつは父親をこの山に誘ったのは私なりの思惑があった。昨年登ったときは、私と変わらないペースで山頂にある神社まで登れた父親が、今年も登れるかどうか。普段、あまり合うことのない父親の老化度診断である。驚いたことに昨年と比しほとんど変化がない。少し息を弾ませているものの、最後まで休むことなく登り、降りてきた。本人は「年をとったな（当たり前だ、91才である！）、去年より登れなくなった」などと言っているが客観的には体力の低下は認められない。

今さながら、すごい老人である。毎日1万歩歩くことを日課にしているし、時期が来ると、岩泉の山の中まで車を運転してでかけ、ヤマメなどの溪流釣りを毎日のようにしている。1人で買い物に出かけ、料理もしている。時事川柳などを作って新聞に投稿しているし、漢字の読み書きにいたっては私など足下にも及ばない。

先日、日本最高齢だった116才になる方が亡くなったが、もしかしたらうちの父親もそれ

に近いくらいあるいは・・・などと夢のようなことを思っていて"はた"と現実に戻った。父親が116才だとすると、28才違いだからわたしは88才。88才の私が116才の父親の介護をしていることになる。夢と言うより悪夢である。

88才の私・・・想像もしたくないが、到底今の父親のように元気では思えない。すでに死んでいる可能性が高い。今でこそ、生活習慣について患者さんに毎日言っているが、私の学生時代はひどいものであった。安酒を大量にのみ、灰皿が溢れるくらいタバコを吸いながら、毎晩のように徹夜で麻雀をしていた。部屋にはインスタントラーメンのはいった段ボウルが置いてあった。昼過ぎまで眠り午後はパチンコ、夜になると女性の尻ばり・・・略。というわけで悪しき生活習慣の見本みたいな生活をしていた。きっと遺伝子はずたずたに傷ついているに違いない。同じような生活をしていた友人は1昨年がんで亡くなった。どう考えても私が長生きできるわけがない。とすると、夢が現実になったとして116才まで生きた父親の面倒を誰が見るというのか。なによりも、息子が先に死ぬことで父親を悲しませてしまう。かくなる上は、何とか父親に「こばやく」あの世に行ってもらえない。父親も「もう生き飽きてしまった。今年の鮎釣りが終わったらもういい」などと言っている。そうはいいいながら、毎年の健診はきちんと受け、効かないからという息子の助言(?)にもかかわらずインフルエンザワクチンもきちんと受けている。前立腺の手術をして尿の切れは私よりよくなり、白内障の手術もやり老眼鏡を探している私を尻目に眼鏡もかけないで新聞を読んでいる。

116才の父親を88才の私が介護する——悪夢であってもいい。夢でさえあれば・・・



大船渡と仕事と私

県立大船渡病院 脳神経外科

千 田 光 平

一昨年の秋、専門医試験を終え2年ぶりに大船渡に戻った私が目にした光景は変わり果てた街並みでした。以前大船渡病院で勤務していた時は今以上に未熟で、仕事と試験勉強に追われ、山馬越の高台から麓に降りることはほとんどありませんでした。思い起こすと過酷な9ヶ月でしたが、時折麓に降りて飲み食いした街並みは今でも覚えています。そんな街並みは一変し、内陸で悠々と生活していた私が難行苦行の日々を送ったスタッフと一緒に仕事ができるか憂慮する中、再び大船渡での生活がスタートしました。

私の心配とは裏腹に、救援に尽力された方々は、震災の影響を感じさせることなく接してくれました。専門医試験前よりも仕事に余裕ができた私は、以前よりも麓に降りる機会が増え、日々復興する街並みを堪能することができます。一昨年赴任した時には数えるほどしかなかった居酒屋も、今では至るところに建ち並び、夜の街を華やかに彩っています。最近では通岡まで足をのばし、好物のじゃじゃ麺に舌鼓を打つことが私の日課となっています。相変わらず忙しい当院の脳神経外科ではありますが、脳神経系の症例が豊富なだけでなく、他病院ではなかなか診ることのない救急・中毒疾患などの診療を経験させていただき充実した日々を送っています。4月からは脳神経血管内治療に長けた先生が赴任してきたため、血管内治療について学ぶ機会も増えてきました。週2回の救急車当番の日は、病棟回診に手が回らないほど救急車の対応に追われることもあります（本当に救急搬送を必要とする患者さんは一握りしかいませんが・・・）。

5月初旬、当院の放射線科の一角にセキレイの雛が孵化し、餌探しに奔走している親鳥を時折目にしました。つい先日、その雛が空に羽ばたいていくところを見かけました。気仙地区も日々復興しており、さらに飛躍していくことと思います。医師になって8年間、大半をこの気仙地区で過ごした私も、復興の勢いに負けることなく診療の技能を磨く所存であります。気仙地区の復興に何かしらの貢献ができれば幸いです。まだまだ発展途上でご迷惑をおかけすることも多々あるとは思いますが、今後ともよろしく願いいたします。

みんなの いわて を 医 協

ご利用ねがいます

医療用品カタログ通販 5,000品目満載 最大89%引き

医用印刷物・医療機器・医療事務機器・衛生材料等々・保険事業・医療廃棄物処理事業(収集から各種報告書作成まで)・福利厚生事業・労働保険事務代行事業

TEL.019-626-3880

購買専用
フリーダイヤル **0120-054-222**

FAX.019-626-3883

URL <http://www.ginga.or.jp/isikyo>

E-mail isikyo@rose.ocn.ne.jp



いわて医師協同組合

IWATE MEDICAL COOPERATIVE ASSOCIATION
〒020-0024 盛岡市菜園二丁目8番20号 岩手県医師会館内

医 院 紹 介

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

うのうらクリニック 院長
鵜 浦 哲 朗

「待合室が広くて喫茶店みたいですね。」「この雰囲気の診療所はなかなか無いですよ。」MRさんに言われると嬉しくなります。



開業を決意して、赤崎町に最初の診療所を建てたのが、平成14年6月でした。地域に密着した愛される診療所を目標に、診察を続けていましたが、丸9年を迎えようとしていた3月に、あの大震災で1号店は、津波に飲み込まれてしまいました。

ヘドロの中にすべての医療機器は埋もれ、壁が崩れ柱も曲がり、建物は流れてきた家屋に押し倒されそうでした。けれども幸いなことに、日頃の災害時訓練の賜物で、開業以来の9年間の貴重な患者さん情報は、そのほとんどが復旧できたのです。

先生が流されるのを見たという怪情報も飛び交う中、震災1週間後には現地での診察再開を決意し、内陸の建築業者を手配し、職員と家族の絶大なる協力のもと、ヘドロを除去し、最小限の内装リフォームを施し、翌4月の仮診療所再開にこぎつけました。

真っ暗な中、うのうらクリニックの看板の灯りで希望が持てた、と言われた時、地元赤崎町に少し恩返しができる気持ちになりました。

仮診療所での診察を続けながらも、津波を受けたこの地での診療継続は不可能と考え、新天地での本格開業を模索していました。立根町を次の場

所に設定し、早速土地探し、2号店の設計図に着手しました。建築バブル、職人不足の煽りを受け、建築費は震災前の倍に迫ると言われました。震災後の補助金、融資制度も二転三転し、1号店との二重債務に悩みながらも、地域医療の担い手の一人として、やるしかないか、と覚悟を決めました。

まず土地ですが、45号線沿いは動きの早い他業種に押さえられていました。今の場所に決まったのは、親身になって探してくれた友人と、医療機関なら大歓迎という地主さんの温かいご厚意によるものです。川のせせらぎが気持ち良い、桜並木も対岸に臨めるこの上ない立地が手に入りました。そして、あとは建物です。

前置きが長くなりましたが、本題の医院紹介に入ります。昨年11月、立根町に転居して、うのうらクリニック2号店で診察を継続しています。期せずして、二度も自分の診療所を立ち上げることになりましたが、二度目の設計図でも、その概要は一度目とほとんど変わらないものになりました。最初の開業の時に、設計についてはかなり練り上げていたので、当然の成り行きだったのかもしれませんが、自分が病気をしても、なかなか他の先生の診療所を訪れることはありません。開業祝いにお邪魔して見せてもらうこともありますが、忙しい中慌ただしく、よく覚えていません。そこで、今回は当院の思い出もある設計のコンセプトを披露させていただき、医院紹介に代えたいと思います。

設計に際して大切にしたのは、①患者さんの居心地の良さ（居住性）、②移動しやすい動線の確保（作業効率）、の二点です。居住性の重視は、診療所を待ち時間が苦痛にならない癒しの場所にしたいという副院長の意向であり、毎日の働きやすさは院長のこだわりです。各項目に関して各々一家言ありますが、細目については箇条書きにしたいと思います。

居住性：靴の履き換え不要の一足制 ・広い風除室 ・ホテルのフロントを意識したすっきりとした受付 ・ダークブラウンと白の落ち着いた色調 ・庭と借景の山河を見渡せる広い窓 ・40畳

の待合室 ・喫茶店を意識したテーブルチェアのセット ・お年寄りのための畳スペース ・ドリンクの自販機 ・観葉植物 ・マンガコーナー ・ウォーターベッドとスーパーライザー ・感染予防の空気清浄機 ・美術館を意識した季節ごとに変わる壁の絵画

作業効率：受付を中心に待合室と処置スペースを分離 ・ゆったりした点滴スペース ・受付に隣接してトイレを配置 ・身障者トイレを点滴スペースに配置 ・レントゲン操作室と検査室と診察室を連結する職員専用通路の確保 ・主要動線である中待合を兼ねた2メートル幅の廊下を確保

以上のような項目を盛り込んで設計しました。患者さんからは、以前の診療所と似ているので違和感がないと好評でした。実際に稼働してからは、収納スペースの不足など問題点も出てきましたが、満足のいく動きやすい診療所に仕上がったと自負しています。MRさんも推奨の癒しの空間になりました。是非一度お訪ねください。

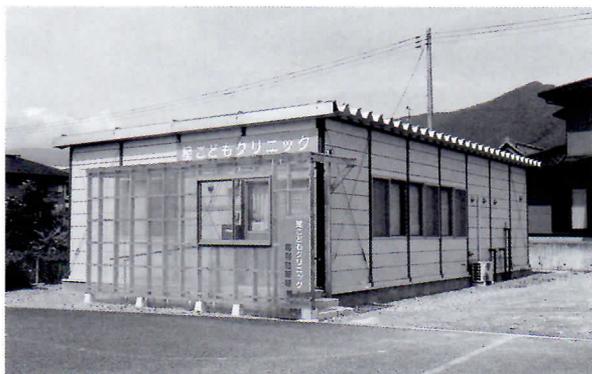


星こどもクリニック 院長

星 篤 樹

当院は2005年5月から大船渡町茶屋前で診療を開始しましたので、その地で6年の診療を続けた時に東日本大震災が発生したことになります。建物は鉄筋造りのため枠組みは残り、内装・外装が施され今も入居している方がいるようですが、あまりの惨状に居続ける気にはならず、全壊認定を受けたこととテナント入居で身軽な立場だったこともあり仮設診療所での再建を選択しました。

当時は場所探しもままならない混乱した状況でしたが、「紳士服コナカ」さんのご厚意もあり駐車



(現在の仮設診療所)

場の敷地が空いているとのことで、震災から3か月後の2011年6月には診療を再開できました。とはいえ手狭なプレハブのためX線撮影装置の設置は断念し、以前より縮小した態勢での診療再開となりました。

また、震災前は木曜日休診で日曜日・水曜日は午後休診でしたが、仮設では月曜日を休診に、日曜日・木曜日を午後休診に変更しました。また診療時間も震災前には午前は8時30分から12時で午後は13時30分から18時でしたが、仮設では朝の診療開始時間は9時に変更し午後の診療時間も13時から17時までに変更しました。また乳児健診の時間を水曜日の13時から14時30分に設定しました。こんな所に患者さんが来てくれるのか?という不安もありましたが、ちょうど予防接種制度の変更が行われ需要が増えたこともあり、震災前とあまり変わらない数の患者さんが訪れて来ています。

現在仮設診療も2年が過ぎ、新しい診療所を再建する目途もたってきました。場所は猪川町合同庁舎裏で、診療開始は8月お盆明け頃になりそうです。幸か不幸か診療所を立ち上げるのも3回目で慣れてきた部分もあり、また仮設診療所での診療で感じたことも生かそうと考えています。まず

X線撮影装置は設置しないこととしました。震災前も撮影数はそう多くはなく、仮設診療時も装置がないことでの不便はあまり感じなかったこともあり、ゲートキーパーの役割を主に担う軽装診療を目指すこととしました。そのため結核2次健診等には参加できなくなりますがご理解の程お願いいたします。2つめは隔離室の必要性を再認識しましたので以前より数を増やすこととしました。インフルエンザはもちろん、現在流行している流行性耳下腺炎などへきちんとは対応できるようにしたいと思います。

最後に診療日・時間ですが、休診日と午後休診の曜日設定は仮設診療所からの変更はありません。しかし夕方に混み合うこともあり、診療時間を午後は13時30分から18時までに変更・延長します。また土曜日の午後は予防接種以外の需要があまり高くないこともあり、逆に16時まで短縮する方針です。乳児健診の曜日・時間に変更はありません。移転や変更内容についてはなるべく早期に周知徹底を図り、他の医療機関へご迷惑をかけないように努めますので、今後ともよろしくお願いたします。



(猪川町前田に新築中の診療所)

県立病院各科紹介

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

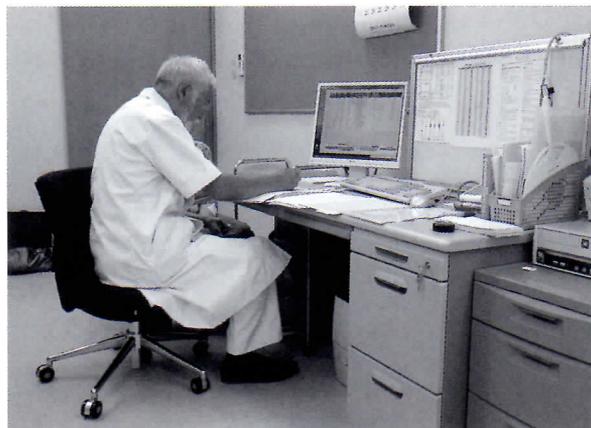
岩手県立高田病院 内科医師
上野正博

気仙医師会の先生方には日頃から大変お世話になっております。「けせん医報」第126号の発刊にあたり県立病院各科紹介のご依頼を頂きましたので、当院内科外来のご紹介をさせていただきます。

当院の再出発である、東日本大震災直後よりお話しさせていただきますと…

震災翌々日の平成23年3月13日より、当院スタッフの避難先でもありました市内米崎町のコミュニティーセンターにて、薬はもちろん診療器具もほとんど無い状態で診療を再開しました。雑紙と米粒にておくすり袋を作ったのを思い出します。

橋や車は流され道路は機能せず、受診できない方がほとんどでしたので、全国各地からのDMAT等の応援を頂き市内各地で診療を開始し、4月からは100名を超える訪問診療も開始しました。



医療体制および交通網の回復をみて、同年7月からは全国からの応援を終了し、7月25日より現在の地にて仮設診療所が開所しました。平成24年2月からは41床の入院病棟もスタートしております。

現在の内科外来ですが、震災前の体制をほぼ回復した状態にあります。

「午前中の一般外来」は（他科と兼務ではあるものの）7人の常勤医、県立胆沢病院、金沢医科大学、東北大学からの診療応援、県立中央病院研修医先生（地域医療研修）にて行っております。

「午後の予約制専門外来」では、待ち時間を避けたい患者さんや診察時間を十分に取りたい患者さんに対し、

- ・ストレス外来（県立大船渡病院からの応援、午前）
- ・COPD外来（主にHOT患者さん）
- ・さわやか外来（認知症患者さんとそのご家族）
- ・糖尿病外来（東北大学からの応援、午前）
- ・健康増進外来（生活習慣病全般）
- ・ほほえみ外来（寝たきり患者さん）
- ・禁煙外来を開設しております。

「内視鏡検査」は上部下部消化管、および気管支鏡検査に対応しております。

「訪問診療」は、100名を超えた震災当初に比べて落ち着きましたが、現在も市内の30~40名ほどの患者さんに対し実施しております。

病棟が完成し入院加療が行えるようになってからは、以上の一般・専門外来、内視鏡検査、訪問

診療と病棟を連動させ、加療入院はもちろんのこと、教育入院、リハビリテーション入院、検査入院、ほっとつばきシステムを充実させることができてきております。

（ほっとつばき：病院看取り希望の訪問診療患者さんの入院をスムーズに行うシステム）

ソフト面では震災前の状態を回復しつつありますが、何分杭の上に建っている仮設の病院であるために、ハード面での不安は多々あります（個室管理不能・酸素配管一部のみ・吸引配管無し等々）。

写真の通り平成27年度の当院開業予定地は未開拓のまま、新病院の規模としても未定の点がありますが、今後も気仙医師会の先生方との連携を大切に、市町の枠を超えた気仙地域での当院の役割をアピールしながら、新高田病院を目指して行ければと考えております。

今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



（震災翌日の内科外来）



（新 高田病院建設予定地）

気仙医師会学術講演会

平成25年6月7日（金）18：45～20：00

リアスホールマルチスペース

特別講演

「日常診療に必要な薬疹の知識 ～SJSを中心に～」

杏林大学 皮膚科 臨床教授 狩野葉子先生

薬疹には医療品服用後数時間から発症するものと数日から2週間程度で発症するもの、数ヶ月から数年服用し続けてから発症するものがある。

◎主な薬疹

・固定薬疹

いつも同じ部位に発症する薬疹

医薬品服用後数時間で発症するが多い

内服試験で検証可能

薬剤中止で治癒

皮膚粘膜移行部／外傷部に多い

症例提示) 顔面色素沈着のためレーザー治療を希望した女性

→風邪薬に含まれるサリチル酸が原因であった

症例提示) 6歳で口囲水疱の患者

→抗生剤が原因だった

・間擦疹型（かんさつしんがた）薬疹

擦れる部分、圧迫部に多い。対称性

熱がなく、軽症のため見逃しやすい。

数時間から数日で発症

抗菌薬が原因となることが多い

・苔癬型薬疹

何ヶ月、何年という服用により発症する。

症例提示) プレタールを数年服用した後に発症し、プレタール中止後軽快した。

◎重症な薬疹

重症な薬疹は次の3つ。

スティーブンス・ジョンソン症候群（SJS）

中毒性表皮壊死症（TEN）←SJSの進展型

薬剤性過敏症症候群

◎SJS/TEN

SJSの発症は薬剤服用開始から数日～2週間

発症率は100万人に3.1人

高熱、皮膚・粘膜症状、紅斑・水疱が特徴

皮膚剥離面積：10%以下→SJS、10%以上→TEN

TENに移行してしまうと死亡率は20~40%

初診時の診断は非常に難しく、杏林大学でもしばしば間違えることがある

初診時にSJSと鑑別を要する疾患

(口唇・口腔のびらん、血性痂皮、紫紅の皮疹が特徴)

- ・重症口内炎
- ・麻疹
- ・ヘルペス関連多型紅斑
- ・好中球性皮膚症 (ベーチェット病・Sweet病など)

症例提示) SJSから3日でTENに進行した症例

◎SJS/TENの原因

1. 薬剤→90%

鎮痛解熱薬

抗菌薬

尿酸降下薬 (アロプリノール)

抗けいれん薬 (新しく発売されたラモトリギンにも注意)

2. 感染 (特にマイコプラズマ感染)

症例提示) マイコプラズマ感染によるSJS症例→粘膜症状が強く、皮疹が少ない。

◎SJS/TENの治療 (早期治療が必要)

- ・被疑薬の中止
- ・眼科的治療
- ・ステロイド大量療法、パルス療法など。

◎SJS/TENの後遺症

- ・眼瞼癒着などの眼症状
- ・慢性閉塞性呼吸障害
- ・小口症
- ・陰部癒着
- ・爪甲変形、脱落。

治療が落ち着いたらパッチテスト、薬剤添加リンパ球刺激試験 (DLST) により原因薬剤を特定し、「薬剤過敏症カード」を持たせている。

◎薬疹を疑って診察する際に重要なこと

- ・長期間内服している薬剤も含めて聴取
- ・「お薬手帳」で薬剤を確認
- ・健康食品・健康維持食品の服用も聴取
- ・過去に同じ症状の出現の有無
- ・歯科受診などでの薬剤服用も聴取
- ・造影剤使用などの検査の施行

文責：仙台支店学術課 平林

新入会員の紹介

星田 徹 先生

入会日 平成25年4月1日
出身地 秋田県大仙市
出身校 東北大学医学部
勤務先 県立大船渡病院

田口 裕哉 先生 (研修医)

入会日 平成25年4月26日
出身地 秋田県大仙市
出身校 岩手医科大学
勤務先 県立大船渡病院

松本 昌泰 先生 (研修医)

入会日 平成25年12月26日
出身地 盛岡市
出身校 岩手医科大学
勤務先 県立大船渡病院

千葉 洋平 先生 (研修医)

入会日 平成25年4月26日
出身地 奥州市
出身校 岩手医科大学
勤務先 県立大船渡病院

千葉 真士 先生 (研修医)

入会日 平成25年4月26日
出身地 奥州市
出身校 岩手医科大学
勤務先 県立大船渡病院

溝部 宏毅 先生

入会日 平成25年5月1日
出身地 福岡市糸島郡
出身校 久留米大学医学部
勤務先 県立高田病院

田畑 潔 先生

入会日 平成25年5月1日
出身地 宮城県仙台市
出身校 東北大学医学部
勤務先 県立高田病院

会員の異動

異動年月日：平成25年4月1日

吉澤 熙 先生 (鳥羽医院)

A会員からB会員へ

吉澤 徹 先生 (鳥羽医院)

B会員からA会員へ

会員の退会

平成25年3月31日

井筒 直子 先生 盛岡医師会へ

平成25年3月31日

佐々木 輝夫 先生 釜石医師会へ

編集後記

けせん医報第 126 号も無事に発行することができました。忙しい中、原稿を書いてくださった滝田会長をはじめ会員の皆様、ありがとうございました。

巻頭言にある、地域医療情報ネットワーク勉強会には私も参加させていただきました。継続して有効に活用していくためには、医療者にもそれなりの知識が必要なようです。私もこの機会に ICT について勉強してみたいと思います。さて、今年も気仙に暑い夏が来ます。熱中症に気をつけて、頑張っていきましょう。（山浦玄悟）

表紙のことば

7月3日に高田松原の奇跡の一本松が復元されたため、梅雨の晴れ間に写真を撮ってきました。

整備された一本松へ続く道の周辺はがらんとした空き地です。津波を受けた建物が残されており、遠くで動く重機の音が絶え間なく聞こえます。実際現地に立つと、以前の高田松原を知る者にとっては、受け入れがたい現実がありました。

失った物の大きさをあらためて知り、復興への道のりはまだまだ長いと感じました。